人生花出生傳

ヲ 9
613
1

京都帝国大学図書

門ヲ刻
號 619
卷 1-2

草木出生傳

ちくうやぬし
庭のをしへも
ひく世ぬし

古流生花再興一

露居士遺傳之筆端

八ノ序

草木出生傳序

造化之於草木異葩奇葩花形不一履載之功可謂大矣蓋以稟其氣形種子已下之始見于英於枝葉茂盛之後有似君子之淵而今之翫玩花者多不詳其所生不辨

其名實漫取枝葉花葩移插入瓶
中舉世為知生花之法殊不知草
木之生山野川涯者或破於風或
傷於雨是以言所生與其所長異
體失形不獲全者殆多矣故欲知
此道先精言土宜辨言名物詳

其種栽之法知其花實之時而后
可俱諸道也如大坊僧卜友子源
松月堂古流之淵源覩多故是心
軒法眼一宗居士既相其蘊有年
乎茲專弘其傳而應嗜此技者之
需是以好事者游言門不可故舉

之卜友子素有志欲知其土宜與
花趣景日安永乙亥春游行於諸
州始徽作於西舟南紀天明癸卯
秋至東武寓居有日甲辰之秋經
歷千相遠參尾四州関左勝地名
不堪覽也到處稚友隆人相迎受

其傳論諭之暇嘗著草木出生傳
二卷予視其為書蒐彙品物明辨
實形嗟乎用心勤矣門生欲鏤梓
公于世請序予〻雖未學其術而
深愛辭芳且服其精選因以冠數
言於卷端云

天明乙巳秋七月

平安　山田元倫維亨選

神原

序

夫生物之草木其清精一氣者神之智
[illegible]施[illegible]而物形之[illegible]陰陽之親[illegible]
[illegible]物[illegible]也以[illegible]
之天地人性靈五蘊合和[illegible]感
草木者出生之紀[illegible]五大[illegible]和平之系
一心決定清淨[illegible]

今松月堂流造をくらみ彩を放ち人
多しこれ以ても其以後事よりまのひ志徳を
美する人少し中本をよく出生事地よ
應じてものの方々時代世に行世に
事卵を称ハす彩を愛し時の芸術
的優よ楽しむ天性を背き手を彩形れ
て人情逮婦巧まよ所寸人まと実よ

彩をうる時を必ず心の里を含まず清水
しうる所く巧妙しうと川流れ川流
をうてを仮乃形容時化形をを紀
し事物よ深るを形しと乃里は完まる
人を彩よ写ひるを所を所関め形く
迷へるものを彩よ時をうれて作よ
志んをを以よ巧彩をうる立てよく

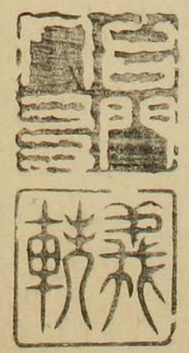
精神を補ふ者全く花を愛するにすぎて
人事を捨てゝ行を和らくる也譬は花を愛する時
て行を常とすれども人欲の
私なし故に性を養ひて邪正明
らかなるこゝろ生を生を養ひ質を
こゝろ文学ハ文質ともに
得ざるを以て人物を好む

人心道に義をすゝめ悪しきを除くこゝろ
し明らめんと心を加へ寸陰を惜
事是人物の好しきを学ぶ業を
勤むる精しきを尊ぶ故に
学ぶ者しきを通よもしきを絶すること
久しきを以て眼明らかなる心を弘
むることの巻ハ寸陰とし社事を尊ぶ

もうて好める人に一助のもと御師説の作を
集めて梓に樓め世木出生伝と名くる
そのかたち
天明二辛酉年仲夏吹子誌

一平あ

五大坊しゐ織



生花草木出生伝始

凡例

○花を生容をもて形すに床を花壇抛入の花平瓶抛花草木
名所夫々の場所(相應するものを以て生形すに心得専也
床抛花を女式なるハ表抛花を雅也を外を俗與抛場所形をハ
行草行草なるハ表抛花を花雅なる成べし
○床なる平瓶なる並抛なる用る也なる床を女式抛とする
形をハ花瓶も主心抛なる迄し平瓶を並抛なる名或也すへて
平瓶を余無と形なる迄し成なる席をいう心得也

○掛物は横物一行物の一幅なり又は二幅三幅四幅五幅に對する
物各々繪或は詩歌書等なれども生る花枝に拘ひ花葉に拘はら
ざる場合なり又繪詩歌書等は草木を用ひずして可也なれども
世間通例の式なれども心得為べし
○花葉を多く横物にて正面は一行なれども脇(襖)にて並也
然れども掛物の横竪格好なれば通例を横なれども
掛花を用ひ一行なれども並花を用ひるも可也こは式に行なれ
ども脇(襖)にて花葉を並べ喜悦の場合を出すべし
○花葉を形にして一行なれども脇(襖)にも花葉を出す也

枝葉花の長短揺動より生ずる前後を前を四分後を六分なる
後を四分前を六分にして地横なれども床は前後左右に中央
なれども花葉は長短より前後四方に別れ出る也
○花葉にて主客を分ち主客は流派秘伝場合なれども
形式を秘伝場合にて調ふる也客とは主客に仕る也
陰陽は二種也陽陰二種は陽陰場合にて陽方
面に東方面に二つを用る也東方面を陽場合に用ること
なへ前後は陽方面に仕る也川端の席は
上座を客座として花の座を花葉は上座より也是迄通例

持主客持ちかたてよ後しこすする儀也

○主客ある生る人大る心得違ひ有り多分世持人も心得違ひ有り
主の花を客主の形しるする事人は客形ある生る客主人ある中を生る
時を主人ある生しる事ある生しと心を主心得違形る
辺しす強る席ある上座行下座行花瓶ある又上座行下座行ある
と持合ある上座を主さ主ハ下座を主すさ主ハ下座を主さ主ハ
上座を主すさ川主花瓶持上座下座を主る事あるは後主
主花持座を定る儀也全く主和客形を儀陽持二座形生ハ
必寸形を主形ある生るものとを心得違すす狂樂の花をもるる

客形ある生るその也表會席連花形の時を主席持模様よりて
主客川主主もれる也全席形主主形時事形主心得へしこの
主客持ち社方用ひ粘他流ある種々持主儀有るを主徐々も
書流持表へとを心主る記す主々かく知違し
○花瓶ある主いる主行草持二瓶と円具するとる工夫を引り
事主曲瓶をなる色主寸主主行草持二瓶主主る行る草
るも各々主行草なりて九正の花瓶なる主知形ある主
かく主ハ主ちかを主通例を五瓶円儀して不具形主る私の
心得儀主ハ求めすして主行草川主主も円成する也

○花を生ずること人よりすぐれ、まことの一瓶を以成時は
立て礼儀を紀す色し寸辺の軌範なる石葉より作法ゆく
てを一瓶の数多を欠ることも心得るも心得色し
○花及物を一瓶中を下り高くする色し並花をこうとし撰花をこう
とかして心得ゆり詞舟なる花卉をこうるまでを以る月人なる心得を
○花を生ずる法進むまで近くるも花盛なる移ひ拭中淡多乃ち移ひ
事繁しこうまを事法より及ひうをし悉くこうること也
以上なる規格を予ら家なる門社の事なる部する者也若
外徒なる人不業なる法業を門に入て知色し

附録

○生花因由名古事を先師一義左甲陽石瓶四季石瓶より
く書ゆくし並是事なる也こうまを事を異寸今家なる一流を
松月堂古流と名付世に流布節をこみ広なる廣記事を門社の事
に應しこうまを数多なる瓶花を撰こうまを以て後ら手引さる人の一助
ともこ四季甲陽なる両編に功もし勢若干を求めて工程を明
むる門社の事なる草稿ら是事なる意味を異ってケ條を出すし
たゆきし

○生花因由濫觴二流分記事　○生花流係相傳なる事

○生花等系を切ること事
○古人枝葉を切ること事
○陰陽五行理を協さるを用ひさる事
○蕾の生花他意多記事
○立花生花大同小異の事
○生花を枝一葉を系る事
○花実共取る事
○花を人物鳥を養ひ菓を雑を養ふ事
○山野の草木花の事
○事盤物を遠ハさる事
○生花と規矩の事
○鶏頭躑躅毒草毒木不用事
○毒草毒木も取捨の事
○荊棘を遠ハさる事
○蓮花を祝儀に生る苦しかさる事

○汚骨の中花の事
○馬盛庚の事
○送別の花の事
○生花を染陽の花心得違の事
○生花を用心の引を切ること事
○生花を中央より出す人の事
○生花表行草の事
○表行草花の各表行草の事
○表行草花の皮肉骨を分する事
○元三松の古式
○星夕の竹の古式
○神事佛事の花の式
○仙花丁蓼の事
○祝言の生花の事
○縮抑條の事

以上七條甲陽百瓶の編

○生花盛觴昔日佛在世にて人心慈悲に深くして性地の二つの中にも地性の心を固く存ぜられ除魔を感ずる時の辯

○生花を己が心を以て育てゝ心を不生不滅不增不減なる人間を日々おく一心森動して事位の心を以て育てゝ月に成性草木時心を感ずる時の辯

○花器時表形口訣に付て強て花器を方円三角半月時器に成り地時方形に表形する時の辯

○一草一木一株一莖を天生時位に一辨を生ずるを正表也

幾本も組を異にして組をなすこと時の辯

○草木に表裏二三種もあり組を作るに寸法を定むる余種

に合せて一枝一莖時相とする時を云ふ一本時辨なりと心の辯

○廣く盛觴並に生方時にて昔日天竺にて大花枝の形

に成る花瓶に生り色記るものを付るに寸相應時器物に生ること

に付て表味に成る時辯

○今時世に籠花器に成る板を表すと心に成る得る人多し是に付

て心得違ひの事を委しく口訣する時辯

○今時に生花會教多ありと雖も表裏の格に成り表味を

失ふ事少かず成る心を口訣する時辯

○今の世にあらゆる花を生ける者の形ちに以てあるまじき理に拘す

とするの辯

以上の十條四季百魏乃編

○四季甲陽の編を一齋西士現在の眉目也この両編にをいて他流
乃沙汰を論じ或は是非をなすことを寔に避りて今は初心
門社の為めに花圖を撰せし也何ぞも陰陽五行皮肉骨髄
兼備の形を以てし真行草の備へも草木の自然に契ひて文
理葉にも圖を描写し以て是を比すに入れずして花圖外にある
其傳を志すさへ草木出生のことも専ら加へし生ることを草木

の自然に習ふといへども其門流の人の手に係りて志を
かさ記その内神を治めて見ん其門流を避し

○其出生傳を一齋西士の口授を以て初心門社の為めに草木出生の
生ることを各々傳を誌しかの志るしある地となる野園その草木生花
にこれ揚げに不率擦し以て門流の花に形にあいてなも異なへるまで異なさることを
に草葉木の名數形ち欲すも其を揚る事を誌し志かるを以ても
千々一の草木を生けるに天々の種類を以て具はることに出生を紀す
と松月堂古流花家の極秘書也只傳

○すでに御草木の名数を撰ぶることは傳を志るさず草木の形ちに付る

用捨ありてかりを拵へ床飾の時圖式を出す末世一巻を出して諸子
千万一時草木を心ゝ千草百木の種類を分ち三十一文字の作要
を加へ言葉実を刈る作法の秘をよく合初心の人の心得専花
半の形容具成時花形を作ること出生時姿を圖する也
○兼日に拵へ草木野園を深く考四季をかちこと名数を書出す
こと肝要

春

梅花 花初春より中春に至る初花より先き也花魁形
名付り単へ重へ作り緑萼梅東牡丹形と云名木也○**李花** 花二月より咲く杏に
似て少く紫梅に似たり○**杏花** 花二月より花紫色也又梅に似たり
糸挽くしてもー花落ると形り○**海棠花** 又加形ーとも云二月花を蓋て同色也海棠色花二月
○**梅花** 二月也但ー中春より十五日の頃花盛也
山梅と早ー八重を通ー花数品々有也○**重瓣梅** 二月を花時盛りとする也花紫
梅に似る枝垂く木也

その也又ちまきを
重絲海棠とも云○**新正梅** 二月彼岸時より後盛りる也この名付り花単へして小く初と
名付りとり又ちまきを貼梗海棠とも書也
○**利休花** 二月花作り初也又白色二種作り
又麻梨と云作り其ちまきを刈品也○**槙檀** 花桐とも書二月に咲花する也形
作る海棠に似たり俗に唐木瓜と
云○**林檜花** 二月に初花を咲く花葉とも
梨に似たり花辺〜六葉也○**桃花** 三月末三月初時より後花作り単へ
八重作り白桃緋桃作り又一枝に赤
白咲交る也月月桃と云俗に原平桃とも○**金絲梅** 二月に花咲く花時に棟棠に似て
云又重絲桃とも云作り花の形も碗のごとし
○**金絲桃** 二月末に花作り葉に柳に似たり花も
黄金色也心金色のごとし○**棟棠** 二月に花作り黄金色也単片形り
と金梔と名付け茶蘼をやまぶき
と刈すること大なり○**茶蘼** 三月末に白花を咲く葉はとし葉ふき
作りなりなり単八重作り枝葉に似たり
少ー花うし沈合に咲也○**楊桃** 一名に合桃四月末に紅白花を咲く
葉に似たり千葉也楊桃はまれ也
又一名に山楊桃と云
○**錦帯花** 二月に花咲く内白く外赤色形小鈴はとし又
作れば形るものから一名十姉妹四月中に
花作り○**笑靨花** 二月花咲く細白米はちり碎也
とし〜かるべきこの名作り
○**小粉団** 一名牡丹二月に花作り
白色にして房を形す

葉細く條也く下へ垂る也

○石榴 三月末より四月初旬まで咲花を用ゆ根は草木葉

葉白二色

○辛夷 一名木蓮 三月花より花の外葉なくして内白く葉も花のうしろより

○木蘭 一名木蓮 三月花より 蓮に似たり葉色也

○玉蘭 大山蓮花と訓す 三四月より花より白色にて木蓮より少し記るくして葉も花も少し大く

しかも咲也木蓮木蓮

○荷苞牡丹 二月花より花葉さらして相ゐ〻葉を小し

ちいさく也 ○荷苞 ちいさく

○夏豆葉 三月末より開花する也白色にして梅の

幹葉つるに似たり葉に似たる葉を多加へとなし

○茱萸 三月中旬白花より鈴鐸のごとし

竹に似たり ○紫草 一名地血草 白花より五葉也

茎赤く葉も葉の多く似たり ○歐蘭 初春より花を記るく

一茎一名也葉大葉

支門に似たる細き〻葉花を

心葉也白花を咲さたり ○蕙蘭 三月花咲一茎に八九花より

葉は加へたり歐蘭に同し ○白及 又一名

連及草

葉他倫草に似たり花歐蘭に同し ○他倫草 三月に花咲黄白数種より葉は形

但しはしさたる以外也三月開花する也

藜蘆に似たる葉はあり也

○山藁 一名鈴藁 三月に花より葉に似たる一茎に花多く

鈴は盃ひたるごとし葉をくるる似たり

○馬藁 二月に紫碧花を記るく形ち蝶に似

葉も蘭に似て短し

実

合歓 一名合昏 五月に花より彩れ

糸はなしし葉は槐に似たる細し ○楝花 四月末より五月初に開花する也葉は

実を金鈴とも

名付

○紫微 一名百日紅 六月に花を開き七月中秋まで咲也

花より赤きもの名付るも未皮脆かたし滑なり

俗に猿すべり

○牡丹 一名花王又は百花王 四月中旬

少し遅し葉を牡丹に似たる別品なり

○草牡丹 四月より牡丹まで

宿根より生ず苗葉に似たる別品なり

○芍薬 一名花相 四月より五月まで咲

○蜀葵 一名戎葵 四月に花より形木桂に似たる花大き也

草葵千葵赤白

○錢葵 戎葵に似たる葵小く又花も浅く大

はなしこの四へは名なり

○槿花 一名蕣 六月に花を開き初秋まで咲葵葉

以後葵也 ○鼎栗 四月に花咲葉千葵なり実を落し紀

中へ蓉に加へ紀也 ○虞美人 四月に花咲草葵千葵なり実を落し紀

又別なる名草に八別也

一術なり

○檀特 花五月

ちいさく 小さく 一名国俗美人草と也

要する也

よりも鮮なり色葵に芭蕉に似たり　○美人蕉　四月頃正に花梢のごとし高さも葵芭蕉に似たり葉短く花秋に至て殊に美なり

○山梔花　五月に白花を開く〻又一種唐くちなしなり山梔に似たり　○天蓼　葉細く長く木立きく一二尺斗を過すなり名の梔と異

一名夏梔五月花を開く白く莫大子に非ず

蒟醤　ほそ〻と割すなり

○鼠刀春羅　一名碎蓼花葉冬枯る木に似る歩〻芝草

一房六出也緋あり四月に花咲

花形の蟲の如く形揚梅のごとし

○蓮　六月に花咲く水石蓋草一名水芝又曰く

しこの如く形揚梅のごとし　○芙蓉　葉を花と〻に実を菊と〻に藕

と〻に房を蜂巣と〻

○萍蓬　俗に河骨と〻に四月より五月に花

を咲く黄色の一茎一花也枝なし花咲を

萍蓬に似る茎も中に空なり

萍蓬に似る茎も中に空なり

○睡蓮　葉馬蹄に似たり

泥くして葉水起

分る也白花にして淡紫を帯たり五月に咲也

○荇菜　葉睡蓮に似る中花黄色

午の刻に開き未の刻に萎む名なり

して草葉也睡蓮と混

す色〻す四月末

○慈姑　六月に花を蕚花草に似る大也圓穂なり

〻り五月に出り花を　白く中の時に也烏芋を茹肩と〻に一茎出く

に上る　○澤瀉　葉年々古葉し又ヒに似る五月に一茎を抽る白

花なり形武皇華に似たり世に人茲姑と混すると〻し

○浮蔕　国俗に葵と〻に六七月葉碧花を開く葵葵に似る色〻光潤

なり長けに葵を竜古草と〻も八月に枯るなり

○澤桔梗　六月七月花なり以為桔梗に似たり

小花也黍粉こなしきに似たり

○土瓜　○萱草　○吉祥草　○麥門冬　○貝母　○山丹　○夜合

○百合　○蕺蘿　○黄精　○秋牡丹　○金沸花　又旋覆花

秋

芙蓉　○菓　○頼桐　○金瓜　○楊枝　○胡枝子　和に萩と書　○蕎　○千屈菜　○劉寄奴　○黄芩

○青蒿　○秋海棠　○菊秋罗　○蓼花　○蓼菜花利　○野蓼

○紫苑　○龍膽　○玄参　○沙参　○威靈仙　○牽牛花　○天茄児

○粕樓花○葛花

冬

初物 冬より春に咲花也 ○蠟梅 ○迎春花 ○山礬 ○枇杷 ○金明篓

俗に八手花と云 ○山茶花 和に椿と云 ○梅花 ○女樓 ○千仙花

○芍花 ○冬菜 和に菜と云 ○石菜 ○側金盞花 冬より初咲

和に秋に入て初春草と

以外草木春陽暖と云

○歎冬

以上草木平日右掲の外記置し中見出記その数多所にあり

事繁雑に入るを要す 寸色の四季草木見出し深情を実する為

かまいて人情にて作よりすべし色〻家生花よりを要す

草木春日心得の事あり花時とし

○刃木又茎に荊棘あるものを人参とす薊はまたあり蒸して荊もとるし

かす 木瓜長春石榴かゝる見出て生ずるを見て其分生ずる

その地若右の数他の事よりて又余花形くして枝葉を生ずるかゝ

刃木に付て荊を去こと生色〻

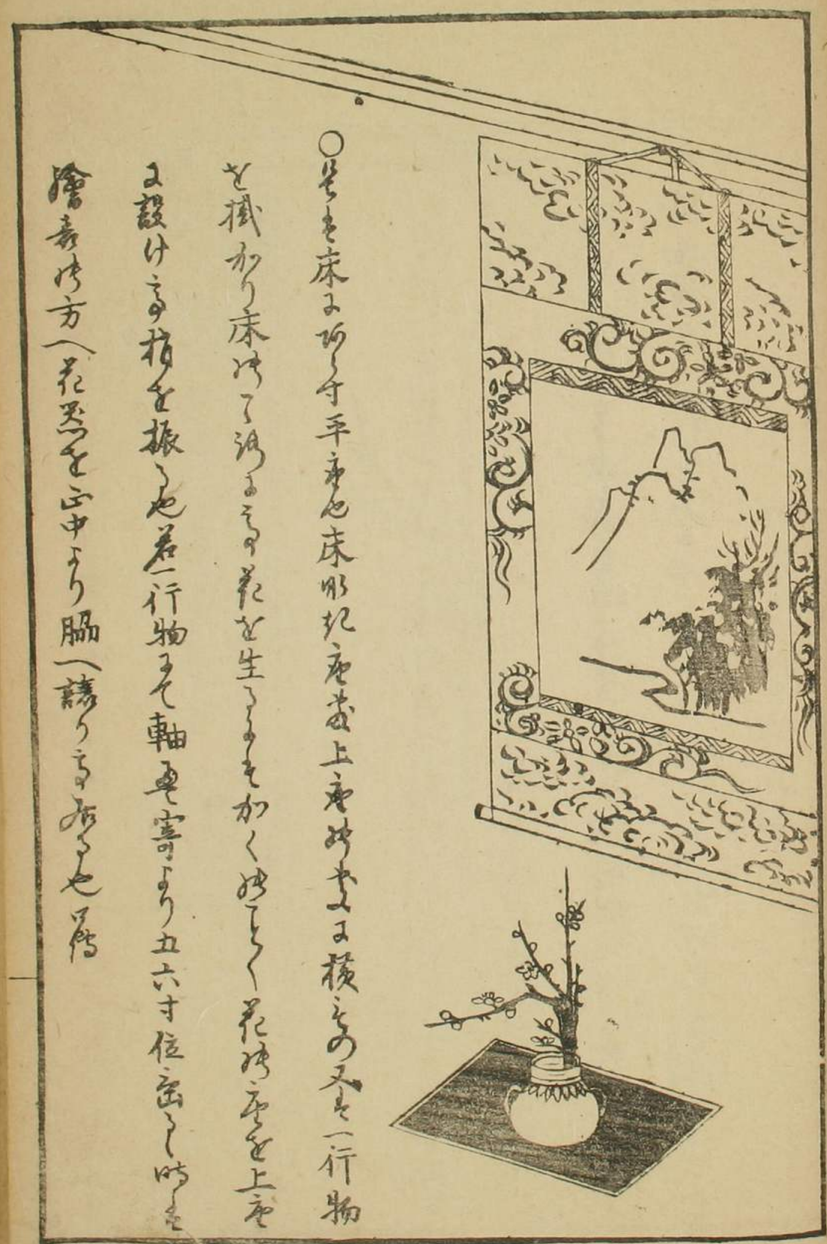
○毒草毒木を常に色〻す死草も小毒の数性右より春に出し

を慎て取るべし かす

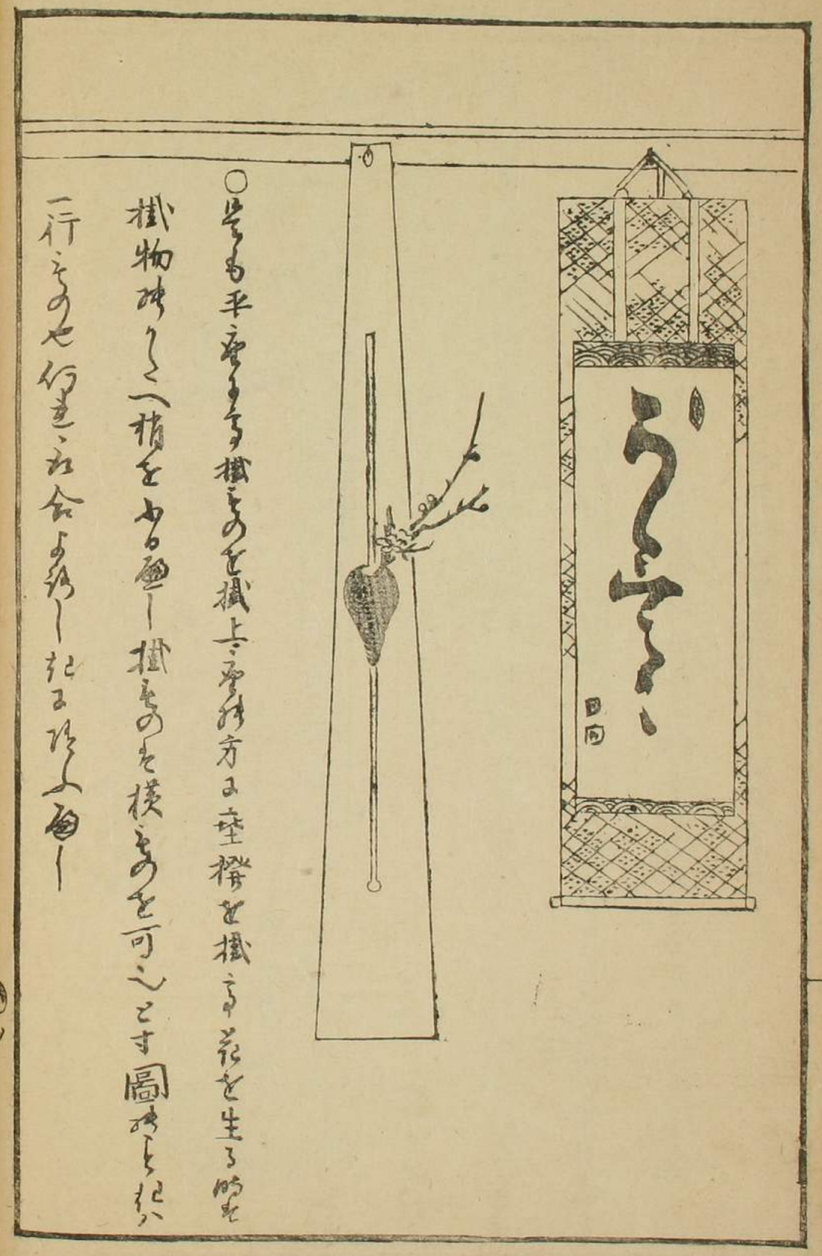
○悪香の事あり常に色〻す木犀沈丁花の数也 亦木犀多くは生ず

と雖も月の中旬に成て来客抔の時を常に色〻す

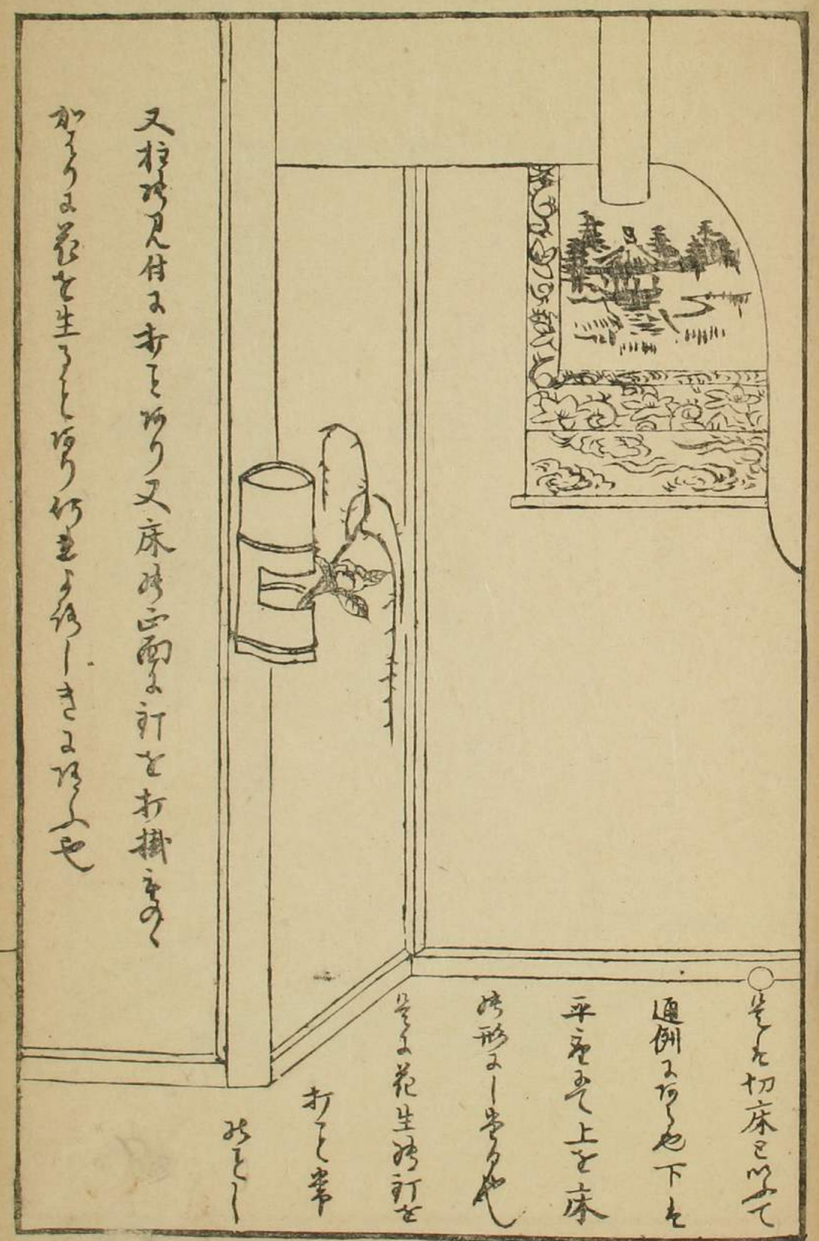
○雜木雜木は數目は人に實數物紀花以盛し紀花形は樹を分ち寸
寸に色うす
○實ものは紅葉は數寸に色うす花を用る人に實樹を盛し物人實を長
と味ひ樹を養に花實結實樹喜ぶことを決して生花と寸に色うす
此外五ヶ條花を數に人は心得肝要也若許すべき員形事紀しこま
許して客来晨雁ともいふべき也春夏物は内二種を許すと
此外は物紀する多分許さず地主に世間通例は許す物を為時の
ヶ條は書加ることと



○花を床に置寸平面床形紀座敷上座は横に置の又は一行物
を掛かり床は了洲るる花を生ることを加く始て花は座を上座
に設けこの掛を振る也若一行物又は軸を寄より五六寸位宜し時を
陰表は方（花瓶を正中より脇（縁）に寄る也

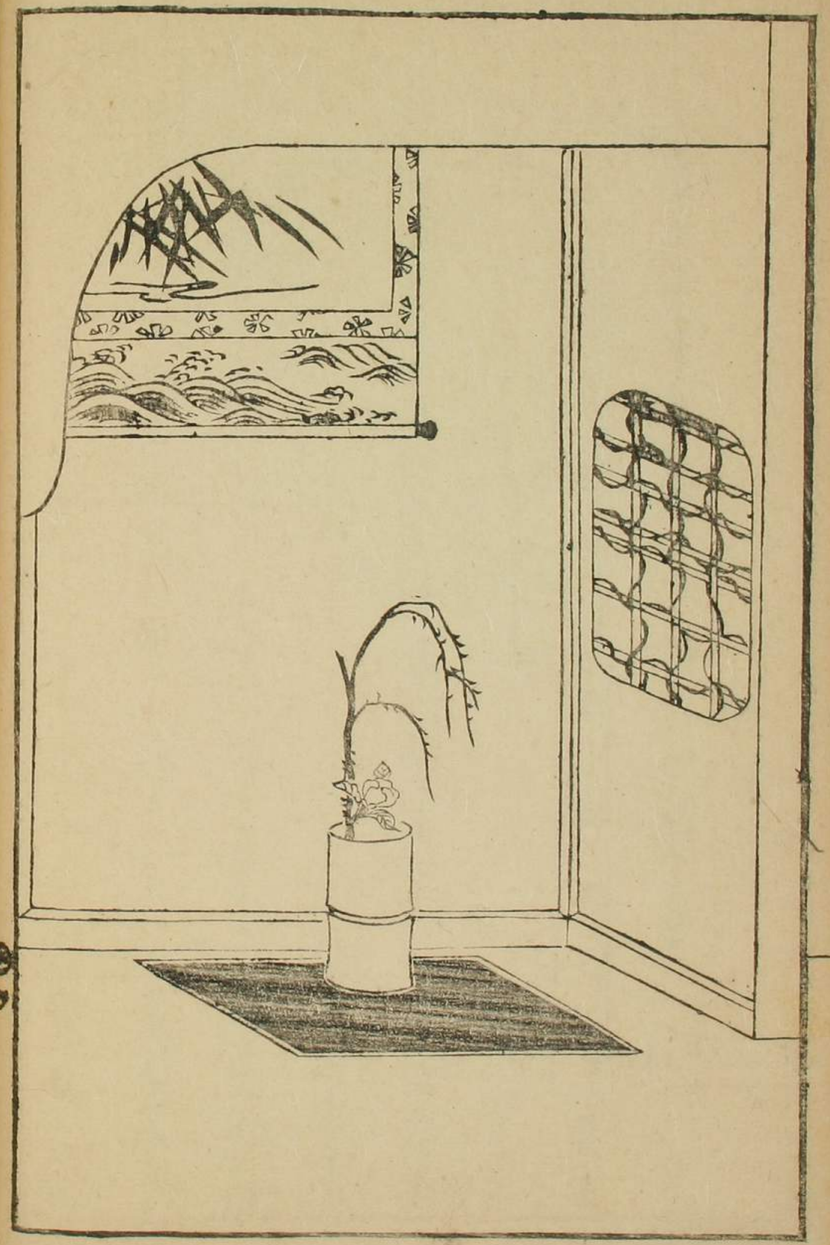


○花も平花なども掛ものを掛上へ平掛方は壁掛を掛る花を生る時は
掛物掛りて一枝を少る画一掛ものを横ものを可ことす圖のごとく
一行その七行是れ合よろしく花を活こと画一



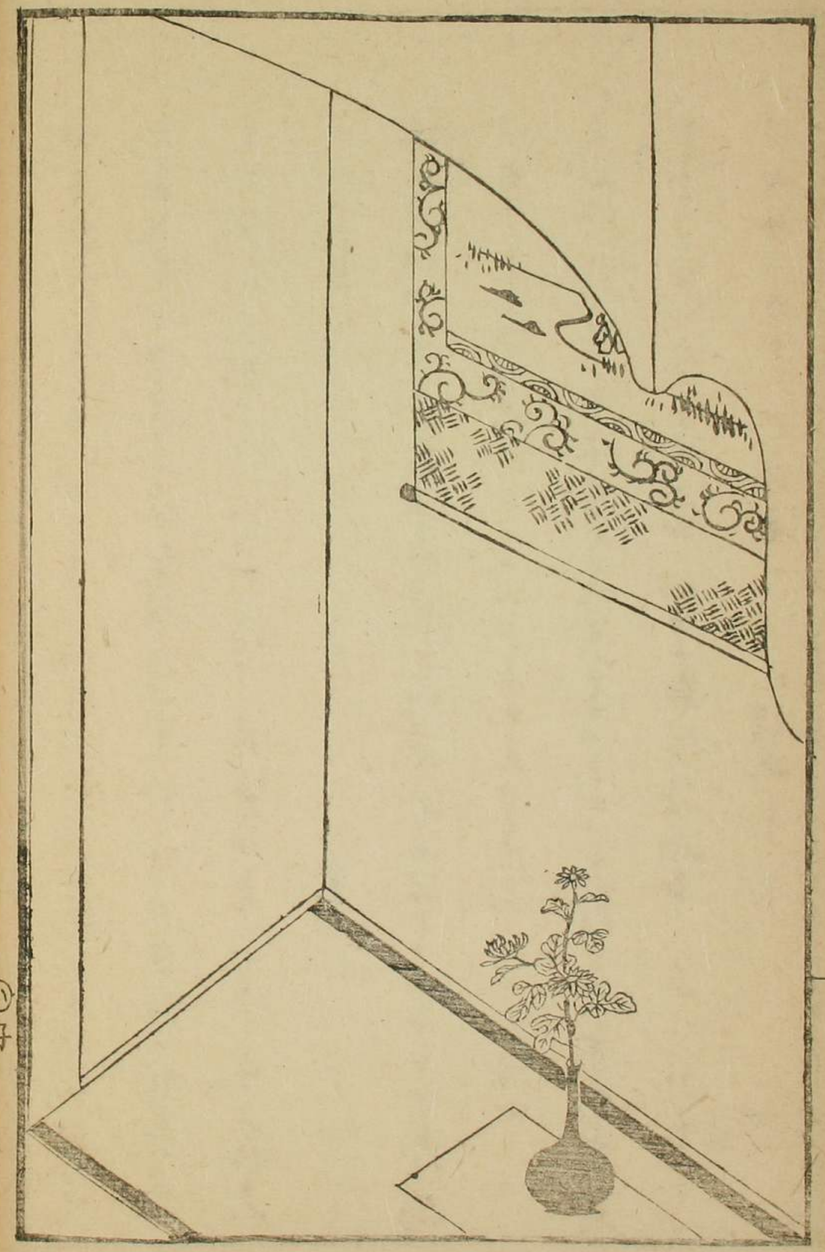
○花を切床を以て
通例のごとく地下を
平にして上を床
の形よし花を生る也
花生の行を
打て常
のごとし

又柱の見付の寸を切り又床の正面の行を打掛ものの
かたちは花を生るとき切り行を多くしきるなり也



○もし洞床にかゝる上洞めとしゝ下も平面なる掛物を掛平面なる薄板を敷立花をせる可也平面なる障屏を立ゝ掛花をせるも又可也とす圖式を横にするも立花をせるもよろしゝ一行にするとき立花をせるなら床内の中和後左右相象花掛働るなら四分六分の割を用る事又四方を脇へ譲りて花器を置る事なり式の床は左様と心得べし

○又洞床に押板を用ひ来るなら掛花器を用ることも立花器を用ることも掛にのべ横竪とよろしきを心得べし



○数寄屋向の茶の湯に言ふ紀洞床なるものは生るも掛物を掛て平常の花を生ること也又掛物の形しの床に付る掛花を生ることは人時の係んもの好也

○上を床の形のごとく下を平常のごとくして切床洞床のごとくにまぜ合る間狭の者は若茶席向なる也

○床の打敷を打事床飾の式を以ての外の間違有也

○数寄屋向の茶の湯寸法の事

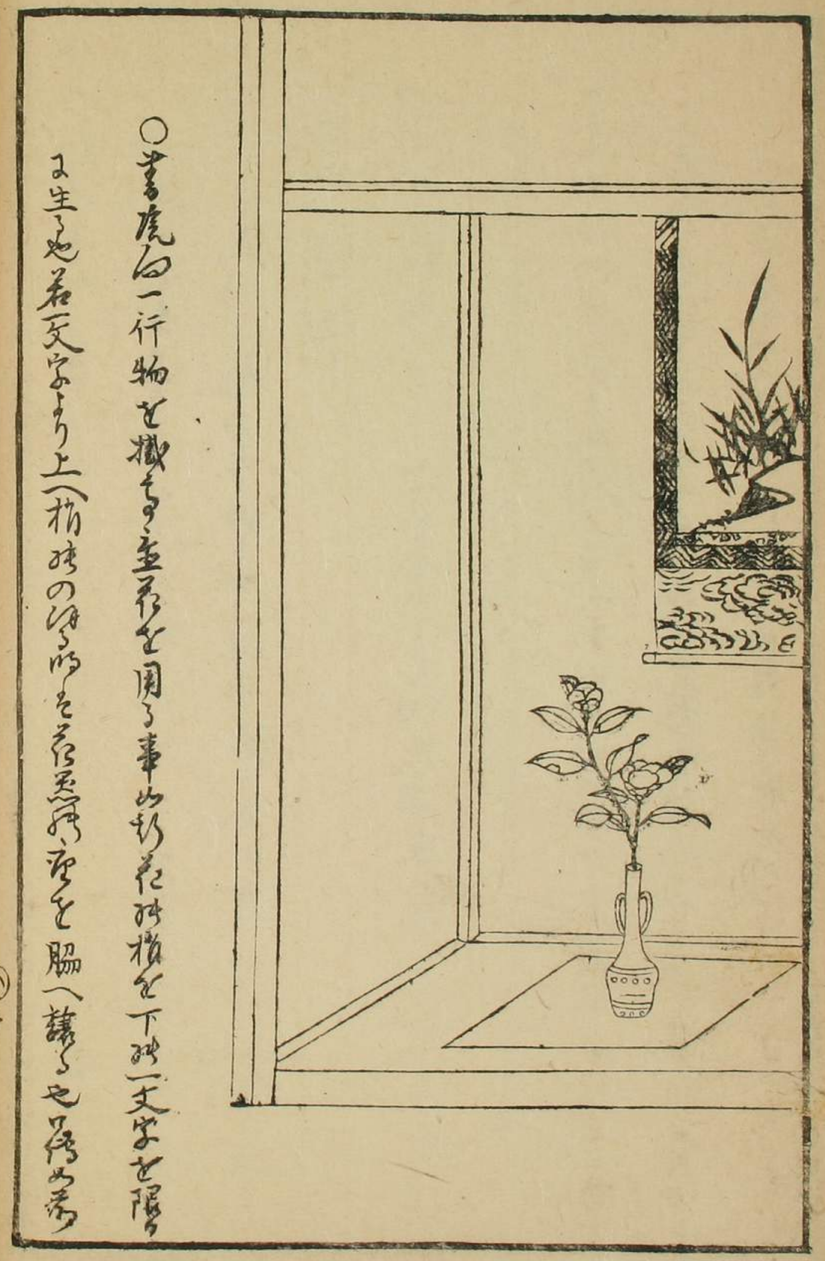
○数寄屋向の茶の湯に掛物を掛て平常の花を生ることは人時の係んもの好也

○上を床の形のごとくして切床洞床のごとくにまぜ合る間狭の者は若茶席向なる也

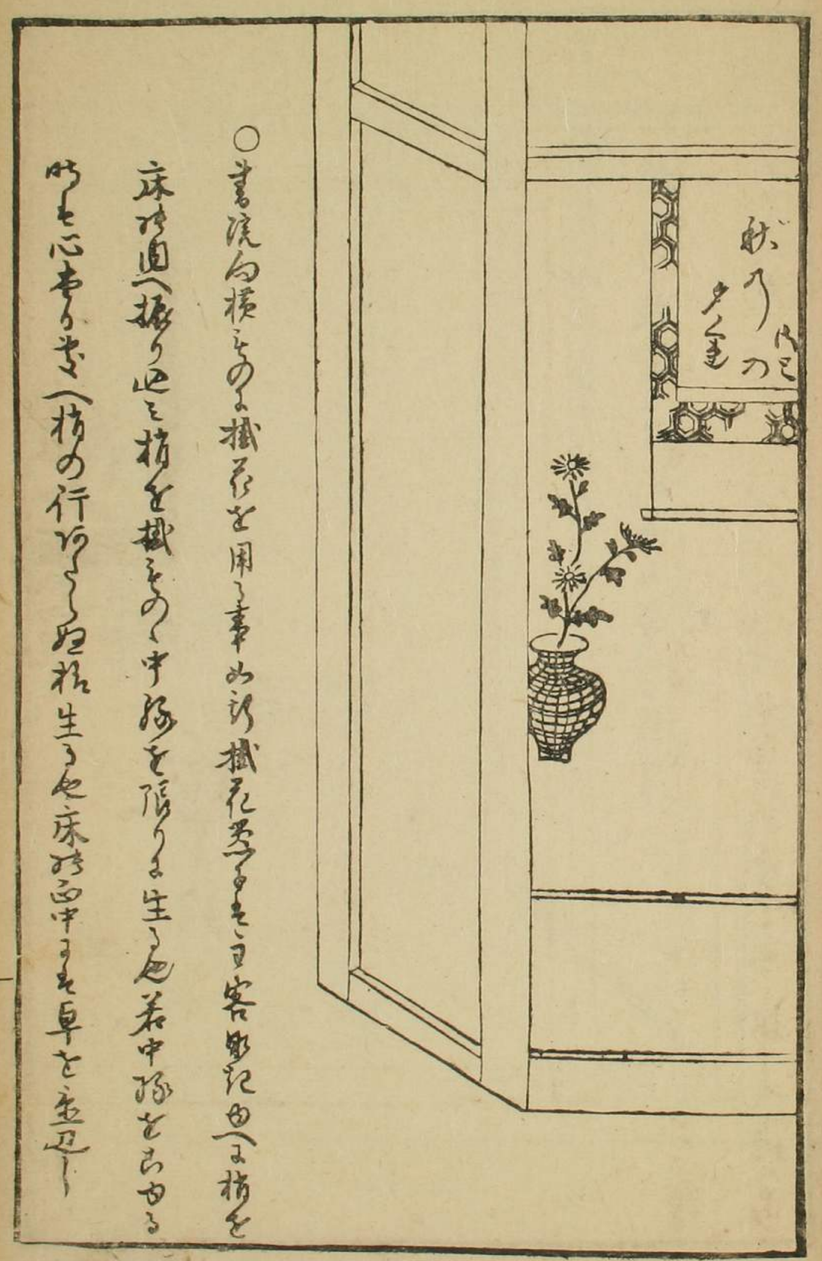
○床の打敷を打事床飾の式を以ての外の間違有也

○数寄屋向の茶の湯寸法の事

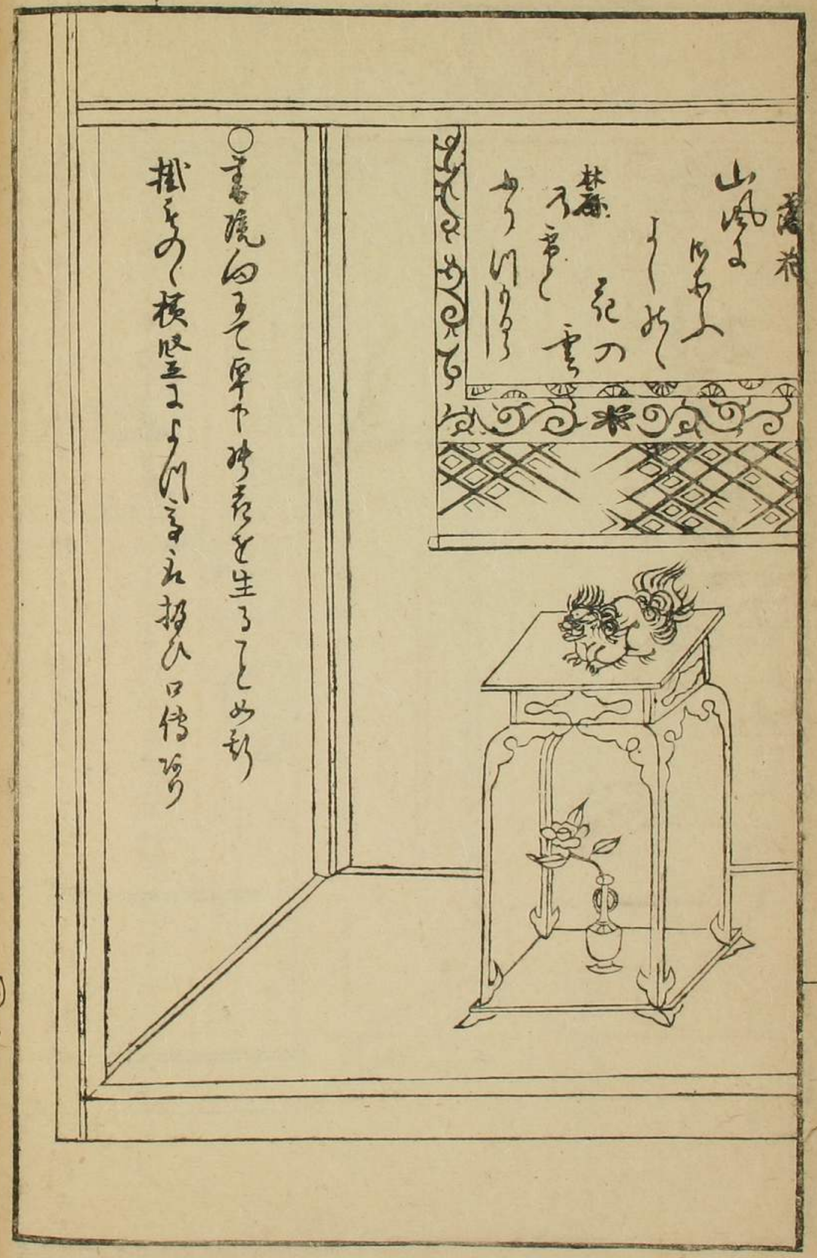
○数寄屋向の茶の湯寸法の事



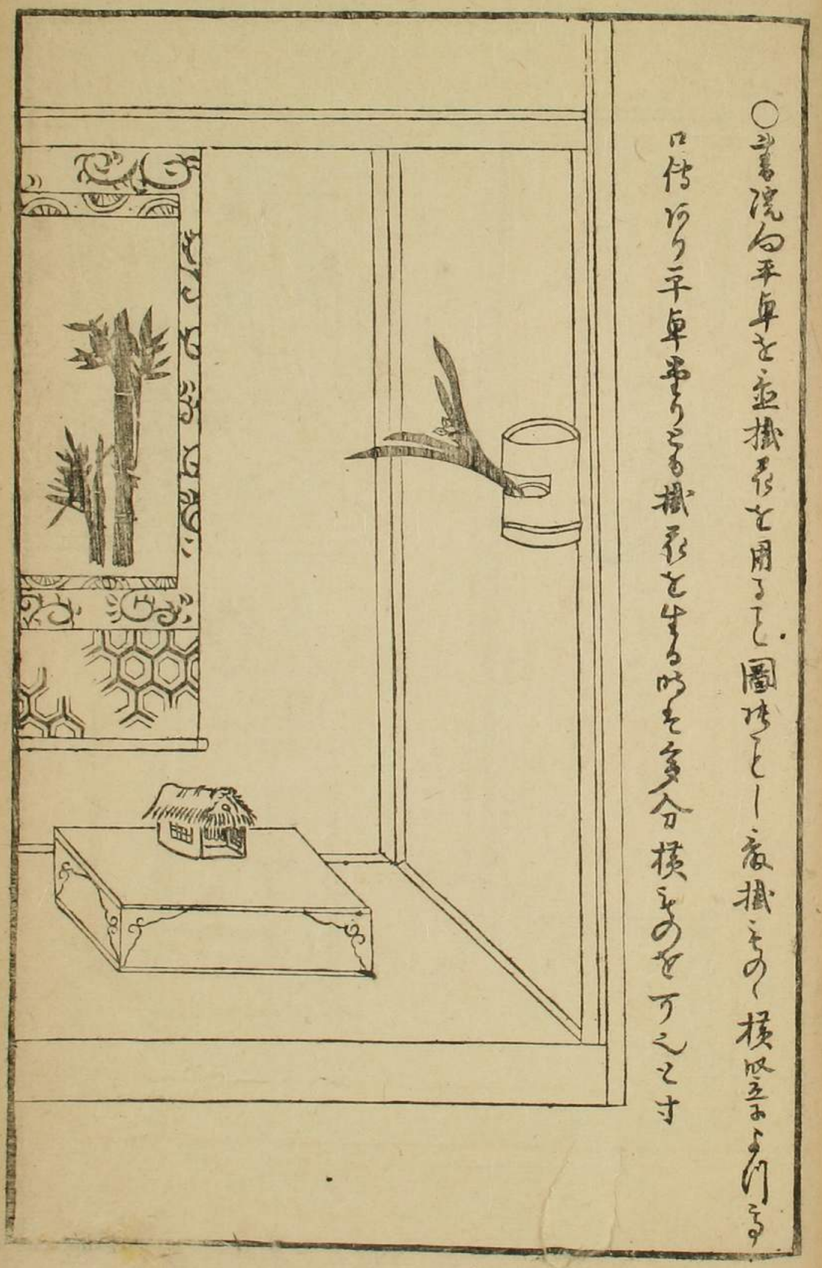
○書院向一行物を掛ける事花瓶を用る事此掛花瓶を下段一文字に置
る生る地若文字より上へ掛時の法を花瓶を脇へ離る也花の高



○書院向横長の掛花を用る事此掛花瓶を用る時客數に成る掛を
床棚迄掛り迄と掛を掛るの中段を張る生る地若中段をもかる
時七心寸る也（掛の行方）迄掛生る地床棚中程を草を立て

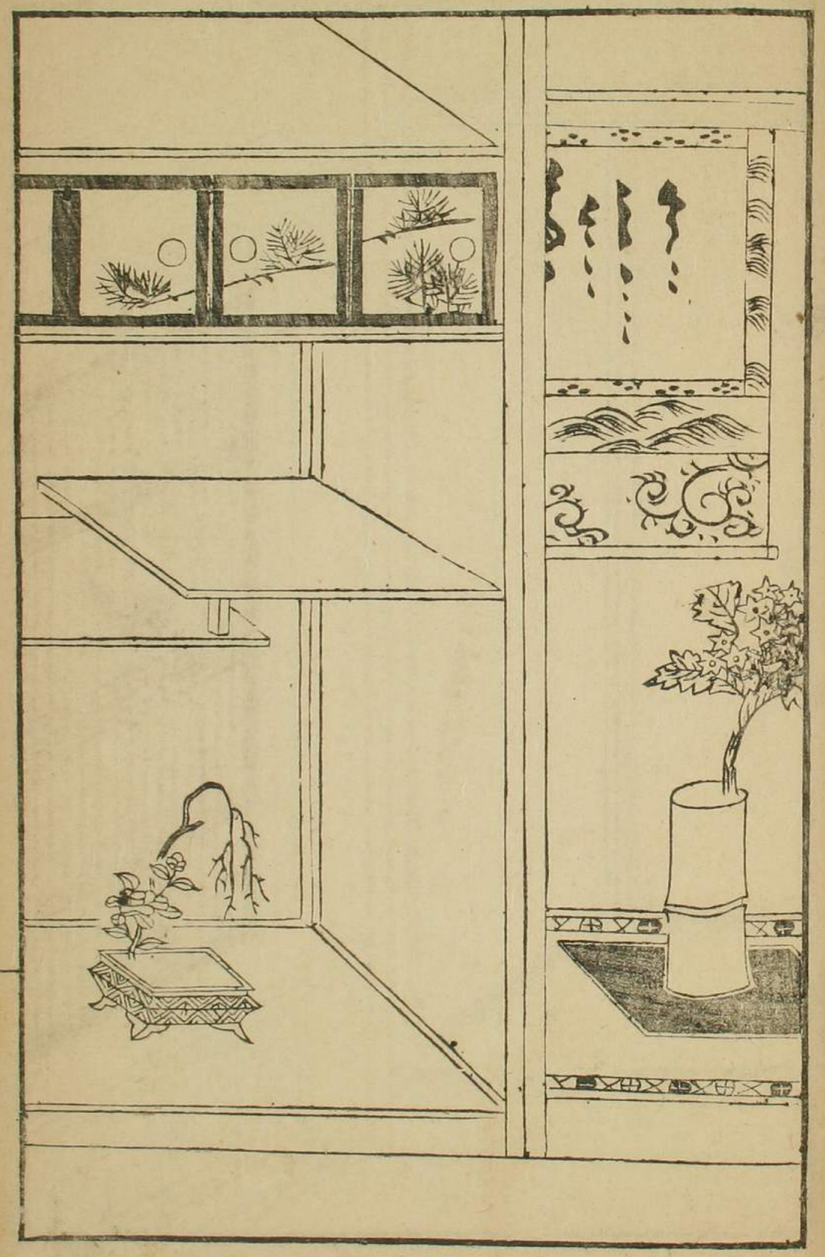


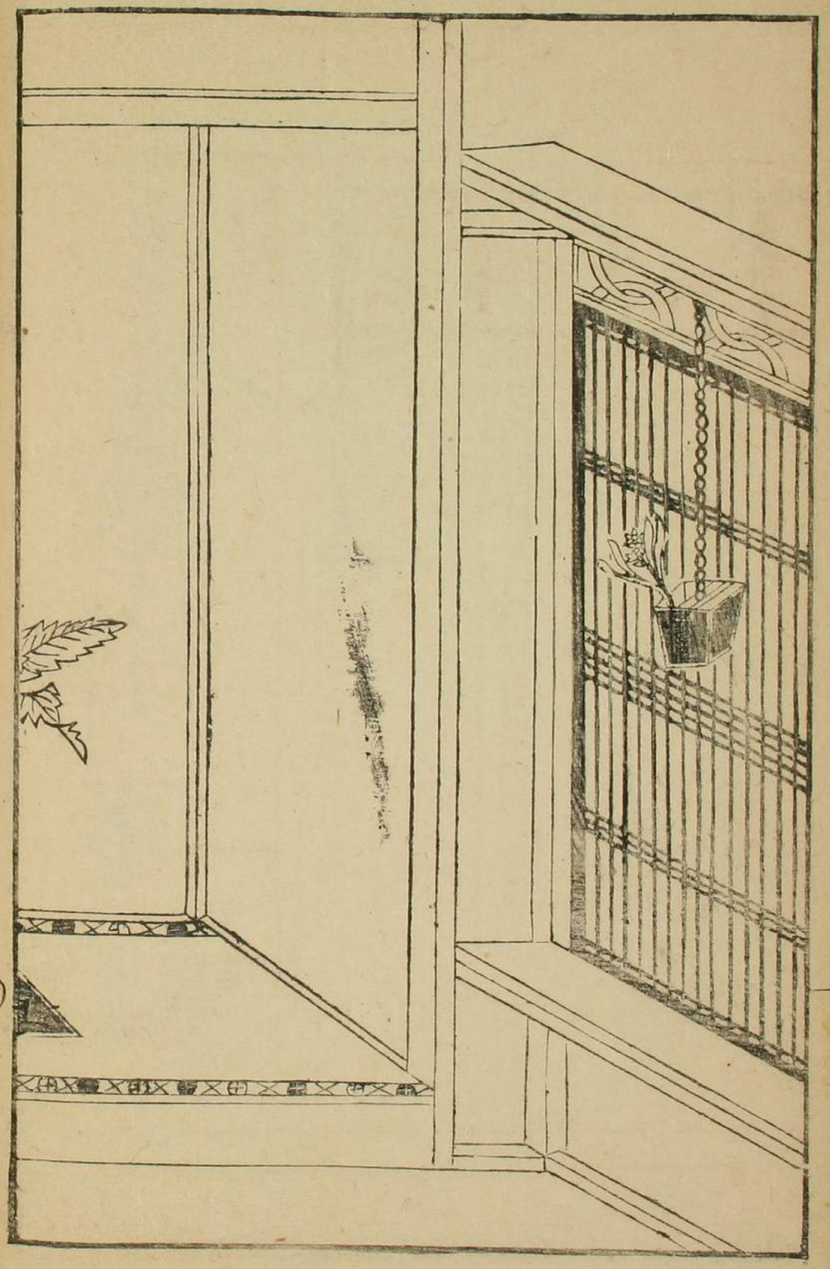
○書院の平卓を生ずることあり
掛もの横竪ともに用ひ口伝あり



○書院の平卓を並掛形を用ゆること・圖体とし・夜掛もの・横竪ともに用ひ
口伝あり平卓帯ある掛形を生ずる時を多分横ものをすべとす

○書院の正面の横長の一行の所にも二幅を掛け中に掛花を用ひ幅對とする
と圖せるとし又一幅の中に掛二幅を掛花を生ずる二幅對なるとなりこれ式通例
掛花にも初心なるを専用也

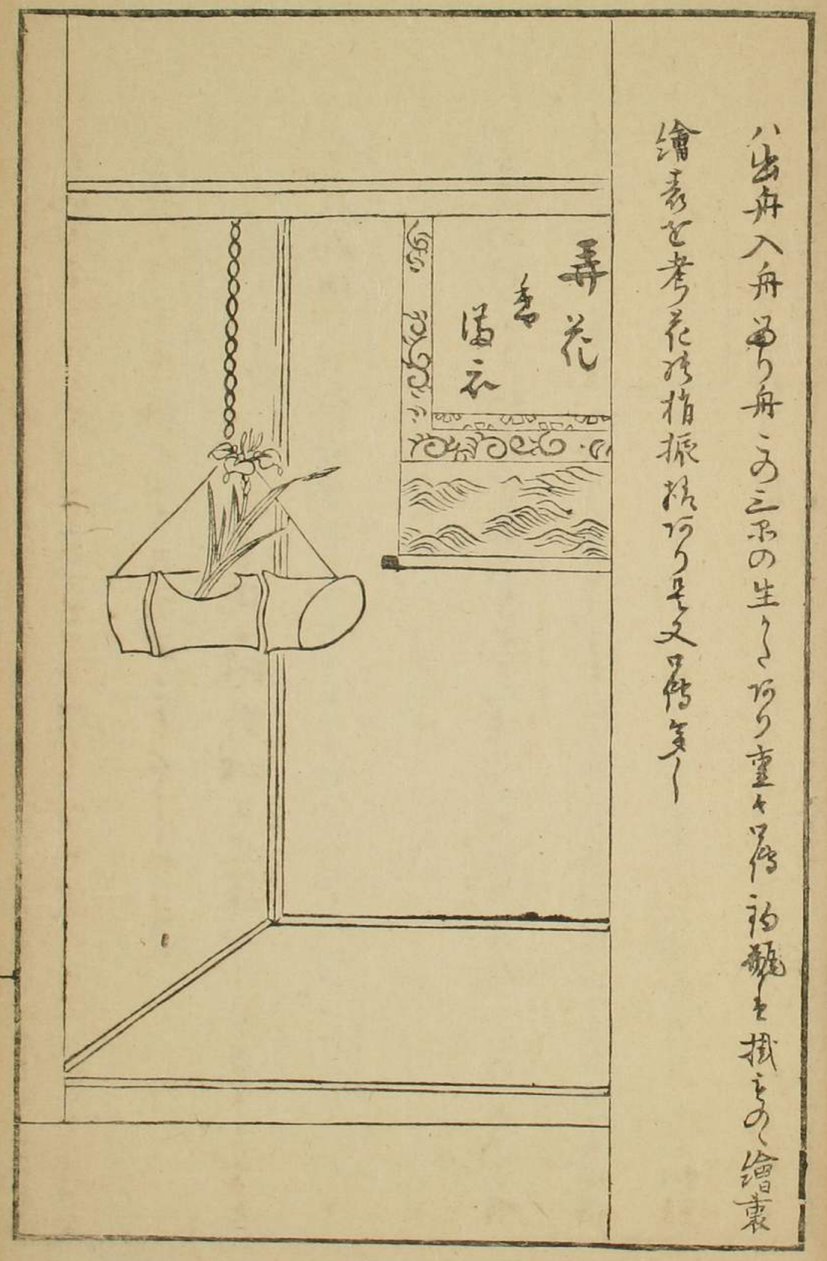




○書院の事花を沢山に生容を尽すべきを本とす式の花を生ずべ
余真に附書院棚下も花を生ずるしかるべ
○又床に式の花を生附書院に流る風鈴棚に文庫かと並べ
書院の通例の飾付也

○書院の内床に設花を用ゆるを要之寸辺に設舟の設花かるの表式を用
床に又は附書院に設るの也式にもかるべ寸余真の場所に用る是を心得
辺に地に世に用る事は用るべかるべ若用るべを之臨對
の別を以て陰陽方に陽陰方に陽陰方に設陽陰二方にあるべ舟かを

八出舟入舟弟子舟この三ツの生ずべかるべ童子に設設を撰べ絵裏
絵表を考花の指振振かるべ又是を



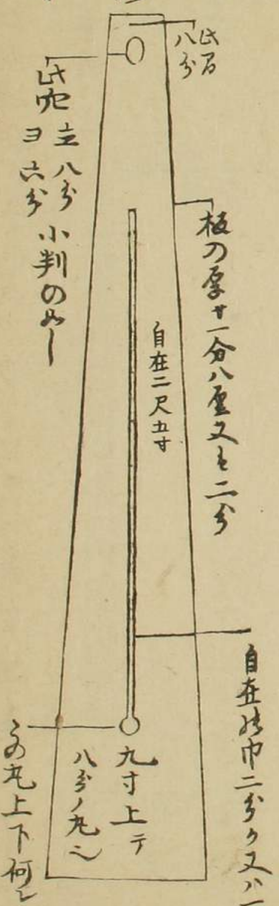
吸上床換格通例の式を圖割りこゝに作事形の図を表しくを志るし加を
〜余を師は張り高を志る辺〜

三九寸二分
唐板中形
巾一尺寸二分

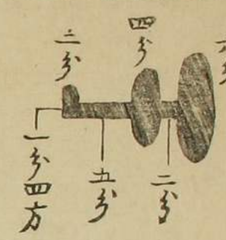
○板を作るにするし加寸但し巾を二分と四分と
の限る辺〜二分時時を四方切四〜四分時時を裏表
共面を切唐傘すると色を藍(ゆえん)と時〜も藍に
とする時も四方時角少し丸く形を心得へ〜

九板中形一尺九分

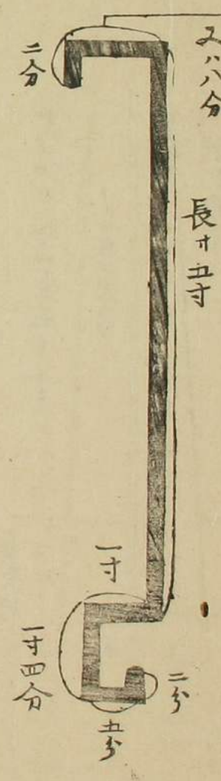
○唐板も角切は六角八角地扇形種々時換板切る
を他流共用也とも義流にて多分圖共
とし〜依余時換板切るを用ゆるもくるし加
寸地並に余り細工也者らを好む辺寸



折釘



二重折釘



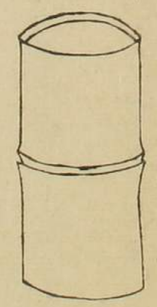
右通具各中形を圖して寸法を記す大形小形法寸法より中形を以て是
障子へも通用して寸法より中形を出す

紙衣筒寸法

○竹法太サ一尺位ハ八寸六分部を九寸位ゟ切廻し

○節を真中ゟ左辺し若竹法横径ゟ四分ゟ六分上へ伸ゟ下へ伸

ゟ切廻し

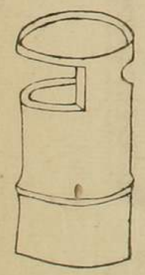


○猫ヶ目一尺位太サ法竹切ハ九寸四分位ゟ切八分月輪ゟ分ける

引寸位ゟ寸辺し太サを四つゟ割二つ分矢ゟ二中口ゟ寸法ゟ一つ分法裏

ゟ月の輪を限ゟ釘穴を明辺し高寸法ゟ八ちゝめ切ゟ

ゟ丸ゟ切ゟ紙長ゟ用ゟゟ切ゟ



○花盆飾りの所に客席杯等の棚下杯を飾
る迄〜

○花盆を飾りて客より花を所望の時は圖式
はとし中より指を並右は方より布巾を並
る上より棘を並迄〜左は方より花を所〜肩
に乗也

○花盆は飾方を客へ向て出す迄〜席生
より出て主客互に礼を為すと雖も
別る迄中該より乃ひかせ〜

○花盆は寸法は圖式の通りにて中形を記す立一尺幅式分横
九寸九分深四分四方巾二分但〜表板巾より深へ入る也又曰
深サ四分巾二分時巾を入る更深へ入る也心得迄〜極
行格あらるもくるしからず

生花草木出生法　始　手

松月堂古流一露居士遺統

梓行古流正統

五大坊卜友 著

壽花軒卜範

壽松軒枝樂

出生傳祕授許の所

平安

浪花

東

方円居運露

千齢館里露

二光庵卜一

牧泉堂李冠

亀齢軒莎来

露鄰館一方

一泉堂露笛

都

甲列甲斐　是心形一調

南勢山田　如雪庵尺五

尾列名古屋　淨蓮社庵尤

遠列天王村　齋鳴鈸知二

同列笠井村　福井笑　呂

竹林形理朴

遠波市茂竹

毛潤亭長川

晩蒼形百列

同列小松村　拍風市倍竹

同列濱松　澄齋庵一嘯

同列坪井　庵蒼斎免園

同列宮布見　繁東庵東旭

同列新坂　宗台庵栟保

三列吉田　白宇斎繁秋

心應形之省

四時庵如来

壺菴市喜村

之列吉田　心恭斎梅是
同列ニテ若　幡竜・斎雲和
冊列ニテ冶　雲谷樓蓮辰
備前西大寺　一中庵川二
同国金岡　喜湘鼓吉香
泉南長木　如月庵一枝
劈列洞津　海雲堂番治
百宜亭梅只
臨江ニテ指月

出生傳吹拳之所

平安東　桂　枝樂
温故堂杜栄
菓花園東吟
四義軒百香
来旭ニテ彭徳
倹養堂淡ム
ニテ湖ニテ吐月
来門　蛙声

江列彦根　伊部主　人
尾列士　石川柳　志
戸田録　波
壹列　宇布見
万郡　壹山ニテ夕河
碎江ニテ規角
輔宣舎去中
次下天王村社中　一兵舎百丈
壹浦ニテ竹静

各士
都
冊列馬場
同
同

青列河原尾　其日坊　才之
同　所　月川を蒲桃
同列国分　小川風　吹
同カメ山　埜を露　之
泉列大津　四方園中冊
同　下杉　幽玄を一洞
紀列和哥　棄門　卜列
高野山　棄門　学文
江列米原　竹林箕　安

次下笠井社中

条景今里松
洞泉沈主人
竹園居嬉洗
一薫を嬉安
清貞冊女竹
望江を巴水
秋帛半倍表
碑を文尤
成泉今卜之

4 10 月

١٥٤